

## 書評

### 王雪萍編著 『戦後日中関係と廖承志　中国の知日派と対日政策』

三宅 康之

#### I

本書は、日中関係を専門とする30代後半から40代前半のパワーあふれる気鋭の研究者による2年間の共同研究の成果をまとめた、きわめて意欲的な論文集である。本書の最大の特徴が日中関係における廖承志の役割解明を共通テーマに据えた稀な研究であることは書名からして一目瞭然であるが、加えて執筆陣が日中台の国際的な顔ぶれであること、2004年から対外開放が始まった中華人民共和国外交部档案を含む日中台の膨大な一次史料に加え、32人にも及ぶオーラル・ヒストリーなど新発掘の史資料を活用していることも本書の価値を高めていよう。

本書のテーマに据えられた廖承志は戦後日中関係史について語るときに欠かすことのできない存在であるだけに、出版直後に主要紙面でも紹介されるなど本書が広く注目されたことは周知の通りである。すでに複数の学術誌にも優れた書評<sup>1)</sup>が出ており、本誌の読者であればこれら書評は無論、本書も読了されているものと思われる。したがって、ここで評者が屋上屋を架すのも大いに気が引けるところである。

また評者にとって、本書の執筆陣はほぼ同世代の研究者であり、本書の基となった廖承志研究会の活発な活動ぶりについてもメンバーから聞き及んでおり、その成果を楽しみにしていただけに、本書の出版は他人事でない嬉しい出来事であった。しかし、公式の場で発表する書評を引き受けるとなると、まず、執筆陣の顔が浮かぶだけにやりにくい。現代中国史研究会会員のシニアメンバーが同時代的に経験しているのに対して、評者は本書執筆者とほぼ同世代であり、「廖承志」の名前にはなじみがあつても、その活動ぶりには実感が無いため、自分が適任者かという疑問も今もある。

逆に言えば、「廖承志時代」の日中関係（史）の同時代体験者としてでもなく、交渉を内側から知る者としてでもなく、執筆陣と同じ「ポスト廖承志時代」世代の外交史研究者としての観点からの評価を試みる、ということで開き直ってお引き受けした次第であることを予めお断りしておきたい。

1) 西園寺一晃氏による書評が『中国研究月報』68巻8月号に、馬場公彦氏による書評が『現代中国』88号にそれぞれ掲載されている。

## II

本書序章での確な各章の内容紹介をしているので、ここでは内容についてはごく簡単に触れるにとどめ、構成の紹介に重点を置くことにする。

本書の構成（執筆者）は次の通りである。

### 序章 対日政策と廖承志—分析の視座（王雪萍・杉浦康之）

#### 第1部 廖承志と廖班一人と組織

第1章 廖承志と廖班の対日業務担当者（王雪萍）

第2章 日本人引揚と廖承志 廖班の形成・展開とその関与（大澤武司）

第3章 中日の対日経済外交と廖承志の役割 実務統括・政治的調整・象徴（山影統）

第4章 中国の対日政策における留日学生・華僑 人材確保・対日宣伝・対中支援（王雪萍）

#### 第2部 廖班の対日工作をめぐる中国・日本・国府の攻防

第5章 知日派の対日工作 東京連絡事務処の成立過程とその活動を中心に（杉浦康之）

第6章 日本から見た廖承志の対日工作 自民党親中国派を中心に（井上正也）

第7章 廖承志の対日工作と中華民国 LT貿易協定・廖承志訪日を中心に（戴振豊、杜崎群傑翻訳）

#### 第3部 現代中国から見る廖承志とその時代

第8章 周恩来と廖承志 中国革命から中日友好へ（胡鳴）

第9章 「廖承志時代」をどう理解するか 戦後中日関係の情報政治学（劉建平、大澤武司・山影統翻訳）

### 終章 知日派の役割 21世紀の日中関係への示唆（編集委員会）

#### 補遺 中国の外交官から見た廖承志

補遺1 中国外交部日本処元処長・丁民氏が語る廖承志（整理・解題：王雪萍・井上正也）

補遺2 周恩来らの中国指導者の通訳・周斌氏が語る廖承志（整理・解題：大澤武司）

第1部は中国側を中心に視点を据えた4つの章からなる。まず、廖承志の「革命人生」をたどり、廖承志の手足となって動いたチーム（廖班）について把握する（第1章）。ついで廖班の成立以前の建国初期の対日政策機構を外交部档案から浮き上がらせる（第2章）。そして廖承志がなぜ、いかにして、対日交渉の前面に出るようになったかを解明する（第3章）。さらに、対日工作に参与し廖承志の活動を支えていく華僑・留日学生のリ

クルートについても視野に収める（第4章）。

第2部では日本側に視点を移して、廖班の日本での工作（第5章）、廖班に働きかけられる客体である自民党親中派（第6章）、さらに廖承志をライヴァル視する国府側の動向（第7章）などが取り上げられる。中国外交史のみならず、日本政治外交史、台湾の中華民国外交史の研究者が、専門性を活かして貢献している。中国側の史料も用いた井上氏の論考では、中国側から見ただけでは見えてこない、自民党親中派の主体性を指摘している。評者は国府側の対抗策について無知であったので、戴氏の論文（第7章）により、地下情報・工作活動などの試みがなされていたことを初めて知った次第である。

第3部ではさらに視点を転じ、史料に基づく実証から離れて、中国の研究者による、現代の中国と日中関係から振り返った廖承志時代の評価に充てられている。2本の論文は、従来型の、つまり肯定的評価（第8章）と現代に禍根を残したという否定的評価（第9章）と対照的位置づけをしており、興味深い。中国では神聖化されているものと見なしていた周恩来外交を批判する劉建平論文（第9章）に評者は軽い衝撃を覚えたことも申し添えておきたい。

こうしたラインナップからも見て取れるように、本書はよく練られた構成になっている。

また各章とも力作ぞろいである。そもそも本書で活用された中国外交部档案館所蔵の外交档案は、基本的にコピー・写真撮影が許されない<sup>2)</sup>ことから筆写にならざるを得ず、中国での史料収集には多大な労力と時間、資金を要することは強調しておきたい。しかも2012年秋以来外交部档案館が実質的に閉鎖状態<sup>3)</sup>にあることから、本書のような取り組みはしばらく不可能である。史資料がふんだんに使われているのは、当然のようでもあるが、その作業量を推し量れば、圧巻とも言え、敬意を表するに値する。

さらに、補遺として元中国外交官への2つの貴重なインタビュー記録が付されている。一般にオーラル・ヒストリー、インタビューは話を聞き出すのも難しいし、記憶違いなどもあるため聞き出した話を裏付けて利用することも難しい。とりわけここでの相手は中国の外交官である。しかしながら、著者らは数回に分けてたっぷりと話をできたようで、それぞれ読み応えがある。これだけでも驚くべき成果を上げたと評価に値しよう。

### III 批判的検討

上述の通り、本書は日中関係に関心がある向きには必読の書である。この評価を前提として、以下、「無い物ねだり」を連ねたい。

2) 公開直後の一時期にコピーが可能であったが、費用が高かったと記憶する。公開条件の変遷について詳しくは大澤武司氏の個人ホームページに掲載されている「中国外交部档案館の歩き方」を参照されたい。

3) 利用条件が厳しく設定され、それを乗り越えたとしても、アクセスできるのは祝電など、『人民日报』や外交資料集などでも確認できる類になっているようである。

1) 本書は一般向けではなく学術書として企画・出版されたものであるが、読者は（評者のように）日中関係に关心があっても専門家とは限らないのであるから、いま一歩の配慮、もっと言えばサービス精神があってもよかつたかもしれない。

関係する人物が多く、紹介が各章に散在しているので、誰が誰だか把握しにくい。欧米の中国研究書末尾に添えられているような人名録があれば随時参照できたであろう。廖班の主要メンバーだけでも顔写真があればなおさらイメージしやすくなつたのではないか。

また、第1部の各章には組織図・関係図などが示されており、理解を助ける上できわめて有用であった。この組織図・関係図自体が労作であったろう。一方で、第2部の各章には図表が付されていなかつたのが惜しまれる。自民党親中派の分布、自民党各派閥へのアプローチなど表やおおよそのイメージ図があれば、工作活動が一目瞭然となつたのではないか。

2) 前節で紹介した通り、本書の企画はたいへん優れたものであり、構成も考え抜かれていることは見て取れる。ただ、この分野にさほど知識が無い読者が読み通すにはややハードルが高い構成かもしれない。読者の側で取捨選択すればよいのであるが、門外漢であれば、まずは第3部の胡鳴論文（第8章）で通説的な周恩来、廖承志の関係と活動についての紹介を頭に入れた上で、史料に基づく再検討、そして対抗的な劉建平論文（第9章）と読み進めてみるのもよいかもしれない。

3) 読みやすさという点で付言すると、注釈の示し方に工夫の余地があったように思われる。各章3桁に達する注（章によっては300近く）が論文末に一括して付されているため、確認するために頻繁に頁を繰らなければならず、手間を要した。脚注であればそうした手間が省け、読みやすさも格段に上がつたのではないか。本書に限らず、著者のポリシー、出版社の事情があるのかもしれないが、執筆陣はこれから単著を発表される際に（注の多い研究書を発表されるであろうから）一考していただければ幸いである。

4) 評者は中国外交史研究では大澤・杉浦両氏から北京の外交部档案館の利用方法を教わり、日本の外交史料館については井上氏から教示を受けている。それゆえ、「釈迦に説法」となるが、注釈と関連して、史料面について触れる必要があるだろう。

執筆陣は中国外交部档案収集のパイオニアとして知られるだけに想像はできしたことであるが、大量の档案史料が用いられていることに改めて圧倒された。だが、各章で用いている大量の史料がどの程度共通しており、どの史料（档案）の重要度が高いのか、などが整理、明記されていると有り難かった。

周知のように、公開度の点では日本側（外務省外交史料館）にも問題があるが、中国外交部档案館の公開度は悪名高かつた。やや長文になるが、やはりパワフルな史料収集で知られる福田円氏（法政大学）のコメントを引いておきたい。

「もちろん、外交部档案の公開も党の公式史観や現在の政治的状況の制約から自由ではない。例えば…（中略）…公開された電報類を時系列的に並べてみても、外交交渉の過程を完全に再構成できることは滅多にない。そういった意味では、公開された外交部档案は公刊史料に書かれたことの細部を明らかにしているに過ぎないのでないか」という印象さえ受ける。また、党中央における政策決定について、外交部档案から読み取れることはほとんどないという点にも留意が必要である。」<sup>4)</sup>

そもそも何が公表されており、何が公表されていないのか、そして公表された文書についても「何が書かれているか」とともに「何が書かれていないか」を最大限把握する必要がある。この点をクリアにするため、また評者を含めた後学のためのことも想定して、外交部档案館の日本関係史料の公開度や、「使用上の注意」などについて史料解題を行う章・補遺があってもよかったです。

また、32名に及ぶインタビュー記録についても、全貌を知りたいと思うのは評者だけではあるまい。インタビュイー本人の同意が必要であるため困難が予想されるが、機会が許せばぜひ公開していただきたい。

5) 史料面はさておき、評者から見てもっとも惜しまれたのは、既存文献との関係性について、序章でごくさらりと述べられた程度に留まったことである。

分担執筆者でもある井上正也氏の大著『日中国交正常化の政治史』（名古屋大学出版会、2010年）が日本政治外交史からの到達点である。この成果をはじめ、先行研究や回顧録類に対して、何を修正し、付け加えることができたかを各章で明示し、終章で強調してあれば、さらに本書の意義が分かりやすくなつたであろう。

6) 廖承志ならびに廖班の活動に焦点を合わせたことの代償ではあるが、日本の政局に（ある程度）敏感に反応していたことは判明したものの、米ソ冷戦やベトナム戦争の推移など背景となる国際政治との連関性の有無は不明であった。関連して、評者個人としては、米英ソなど諸外国は廖承志・廖班の活動をどのように見てきたのか、どの程度活動を把握していたかなどの点を知りたくなつた。

7) 最後に、本書で描き出された廖承志像をどう受け止めるべきか、という点に触れたい。廖承志が知日派の筆頭とすることは間違いないにせよ、また対日関係が廖承志の活動の多くの割合を占めたにせよ、翻って対日関係が廖承志のすべて、と見なすことは禁物であろう。もちろんこれは執筆者の問題ではなく、読者が注意すべき点である。ただ、この点を読者に明確に伝えるためにも、若き日のヨーロッパでの経験、華僑事務委員会や統一戦線部方面の活動などについても一步踏み込んで紹介してあれば、人物像に奥行きが増したで

4) 福田円『中国外交と台湾 「一つの中国」原則の起源』（慶應義塾大学出版会、2013年）、12頁。

あろう。

#### IV おわりに

以上の「無いものねだり」はさておき、本書は日中関係の研究を志す者には必読の書であるのは無論のこと、中国外交史研究の最前線を知るためにも格好の1冊である。

最大の問題は、本書の評価如何というよりも、こうした外交史研究が今後は継続不可能となる懸念が強いことである。日中台の共同研究自体には制限は及んでいないものの、胡錦濤政権の発足後対外公開が始まった外交部档案館が徐々にアクセスが困難となり、習近平政権発足前夜の2012年秋からは実質的に閉鎖状況にある。そのうえ、習近平政権発足後の中国国内では言論の自由がさらに制限され、大学の講義でも「七不講（七個不要講）」が求められているという<sup>5)</sup>。本書の劉建平論文のような「異端」な議論は継続できるのだろうか。中国外交官のインタビュー調査も繰り返せるのか。今後の進展によっては、われわれが手にしている本書は胡錦濤時代の例外的かつ奇跡的成果となるかもしれないである。

この場を借りて、中国での言論の自由と歴史研究の自由の拡大、外交部档案館の開放再開を強く訴え、結びに代えたい。

追記：すでに執筆者・出版社も把握しているかもしれないが、わずかながら、誤字脱字が散見された。念のために気づいた点を記しておく。

21頁下から16行目 熱い→篤い

65頁9行目 考えらえる→考えられる

101頁下から4行目 (注30) (05-) → (105-)

(慶應義塾大学出版会、2013年9月刊、vii+386頁、4200円)

(みやけ やすゆき・関西学院大学)

5) 普遍的価値、報道の自由、市民社会、公民の権利、党の歴史的過ち、権貴資産階級、司法の独立。この文件の存在を報道した記者も「機密漏洩」疑惑で2014年5月に当局に拘束され、2015年2月に懲役7年と政治権1年剥奪の実刑判決を受けた。阿古智子「習近平政権下の言論統制と世論工作：ネットオピニオンリーダー、記者、弁護士などに対する弾圧や懲罰の手法を中心に」『問題と研究』第43巻第3号、2014年。

# 現代中國研究

## 第35・36合併号

### 特集：日中戦争期における対日協力の諸側面

特集にあたって	1	
対日「協力」の諸相—「協力」政権、民衆—	石島 紀之	3
東南アジアにおける対日協力と抵抗の諸相		
—インドネシア・ビルマ・インドの義勇軍の比較—	林 英一	15
日中戦争前後における日中間交渉の一形態—王子恵と彼を巡る人々—	閔 智英	29
コメント（1）	島田 美和	47
コメント（2）	田中 剛	51
総括	三好 章	55
<b>論文</b>		
1980年代の内モンゴル東部地域におけるモンゴル語使用問題の検討	仁 欽	61
<b>研究ノート</b>		
1930年代半ば中国再認識をめぐる日本の論壇—『中央公論』誌を中心にして—	根岸 智代	77
<b>小特集：中国研究の方法論を問い合わせて『制度』をどう捉えるか—</b>		
特集にあたって		92
中国近代経済史研究と「制度」	村上 衛	93
国民経済と「海の近代中国」	岡崎 清宣	108
曖昧な制度と経済史研究—加藤弘之氏の著作に寄せて—	木越 義則	114
「中国的なるもの」をめぐって—木越氏に答える—	加藤 弘之	121
<b>書評</b>		
吉澤誠一郎『清朝と近代世界 19世紀』	土居 智典	127
土居智典さんの書評に対する所感	吉澤誠一郎	133
王雪萍編著『戦後日中関係と廖承志—中国の知日派と対日政策』	三宅 康之	135
愛国と民主の背後にあるもの		
—水羽信男『中国の愛国と民主—章乃器とその時代』を読む—	緒形 康	141
<b>例会報告要旨</b>		149
儲安平の「民主」と「人物像」について—中華人民共和国初期を中心に—（林礼釗）／1930年代半ば 中国再認識をめぐる日本の論壇—「統一化論争」の前史—（根岸智代）／離散與華文文學（李有成）／中華民国史研究（山田辰雄）／中華人民共和国のソ連東欧留学政策（1954～1959）（李昱）／中国民主化の中長期的展望と習近平政権の課題（鈴木隆）／台湾タイヤル族の伝統的戦闘組織について（菊池一隆）／英露協定（1907年）とチベット—イギリスのチベット政策、1904～1907年—（小林隆夫）／Public Health and Private Charity in Northeast China, 1905-1945 (Thomas David Dubois)		
<b>研究会だより</b>		153
投稿規程／ガイドライン／研究会会則／受贈図書／編集委員会／編集後記		

中国現代史研究会

(2015. 11. 6)